

風をよむ

No.81 2007.5.5

編集：共産主義者同盟首都圏委員会
発行：ウインドベル・ファクトリー
連絡先：新宿区西新宿7-3-10
山京ビル503-201

定価100円
年10回刊・送料込：2,500円
郵便振替：00170-0-655767

辺野古新基地建設を許すな！ 5.13嘉手納包囲—人間の鎖へ！

反改憲—国民投票法案を粉碎しよう！ 安倍自公反動・右翼政権を打倒しよう！

4月13日、衆院本会議で改憲手続き法たる国民投票法案が自公賛成多数で可決され、参院に付された。そして、これを手みやげに首相安倍は参院交代よろしく訪米の途についた。もっとも安倍政権同様、レームダック・ブッシュは支持率30%と末期症状を呈しており、イラク戦争の泥沼の中であがき続けている。

しかし、同日衆院で可決され参院に送られた米軍再編特措法を見過ごすわけにはいかない。すでに米軍再編、とりわけキャンプ座間への米陸軍第一軍団司令部移駐を頂点に、日米軍事同盟の一体化が、日本の軍政改革（防衛省昇格、中央即応軍創設など）とともに進行している。

「思いやり予算」からはじまり、今また財政危機など、どこ吹く風と米軍再編・軍事支援のため

- ピースサイレントキャンドル行動
5月12日(土) 18:30~
キャンプシュワブゲート前
- 嘉手納基地包囲行動
5月13日(日) 15:00~16:00
- アジアから基地をなくそう沖縄集会
5月14日(月) 18:00~21:00
於・古島教育福祉会館
主催・沖縄行動
- キャンプキンザー包囲デモ
5月15日(火) 10:00~12:00
於・国立劇場おきなわ隣接公園
主催・軍港反対浦添行動
- 5・15平和行進
5月15日(火) 19:00~20:00
於・国際通り
呼びかけ・平和運動センター

改憲(国民投票)を考える
5月10日(木) 15:00~17:30
於・参議院議員会館第一会議室
主催・改憲(国民投票)を考える五月企画委員会

5・19防衛省抗議行動
イラク特措法延長反対！ 空自は即時撤退せよ！
次の戦争を準備する米軍再編の許さない！
5月19日(土) 14:30/於・外濠公園
主催・新しい反安保行動をつくる実行委員会

に湯水のように税金を注ぎ込むだけではない。基地負担を強いられた各自治体へ、文字通り「札束でひっぱたく」ように、再編協力を応じて交付金を支給しようとしている。逆に住民投票で基地再編計画を拒否した岩国市に対しては、補助金35億円をストップするという悪辣な仕打ちを伴っているのだ。

さて、「沖縄」である。

辺野古新基地建設阻止を 三度目の、最後の勝利へ

4月24日、那覇防衛施設局は辺野古新基地建設に向けた海域の事前調査を開始した。環境アセスメントの法手続に準拠すれば、サンゴの産卵期の関係から年度を更はずれ込ませることになるという

った、環境アセスの精神を甚だしく脱する手前勝手な調査である。そもそも不確定な建設計画である以上、調査ポイントを選定すること自体に無理があるはずだが、即座に対応した海上抗議行動に対して、圧する物量で応じた施設局は日本政府の一部県勢力の「是が非でも辺野古につくる」という意志は、民意や自然環境を「疎外要因」としてのみ捉えていることの本性を露呈した。2004年の沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落事件での対応をみるまでもなく、施設局とは米軍の御用達として住民を脅迫・懐柔しようとする植民地日本の出先機関そのものである。沖縄の施政者は、かような二重の植民地的対応に一定のブロックをかけ、多様な策で沖縄の利を求めざるはずだが、上京の本土産扱いで事前調査をのりくらりと快諾する有り様に施政者の救いようのない劣化をみざるをえない。脱法は許容され、違法が虚飾され合法化される政治世界というものが、あまりにも露骨に現

出してきた。

こうした暴挙に対してひろく抗すべく、4月28日にはヘリ基地反対協の呼びかけにより「新基地建設阻止・違法な事前調査を絶対に許すな!」座り込み3周年「キャンプシュワブ包囲行動が行われた。悪天候のため海上行動は中止されたものの、千名近くの市民の結集によって貫徹された。

「4・28」とは、1952年サンフランシスコ講和条約と日米安保条約の発効により、沖縄を切り捨てることで日本が「独立」した、沖縄にとつてまさに「屈辱の日」である。また1960年の同日に「沖縄県祖国復帰協議会」が結成されている。復帰後35年目を向かえるこの沖縄の姿は、「復帰」ということに託された願いがいかに穢され続けてきたかを物語る。シュワブゲート前で参加者によって決議された闘争宣言における「名護市民投票の勝利、ボーリング調査阻止闘争の勝利―海上基地の破綻―の地平を引き継ぎ、V字形滑走路―辺野古新基地建設の阻止を最後の闘い、3度目の勝利にするため粘り強く闘う」、ヘリ基地反対協安次富代表の「闘いを続けていけば必ず勝利できる」、平和市民連絡会当山事務局長の「今日の闘いをカンパニア闘争に終わらせることなく、施設局包囲も含めた今後の展開を」、二見以北十区の会津具共同代表の「子供たちが誇りをもてる故郷を」という諸発言に込められた思いと



ともに、施政者が法精神すら背く虚飾を続けるのであれば、我々は人民の法に基づき不当な権力による不平等行為を絶対に認めることはできない。

反自公―「沖縄革新」に未来はあるのか

辺野古新基地計画の表向きの所以たる普天間基地を抱える宜野湾市長選では、伊波洋一氏が晴れて二期当選を果たした。彼の積極的な政治交渉手腕のみならず、生つ粋の宜野湾人であり地道な地域対話を重視した情熱と誠実さの結果、そして基

地被害に苦しむ宜野湾市民が県内移設を望まないことを表明した結果である。比べて低投票率に終わった参院補選は、狩俣吉正氏と島尻安伊子氏の「保革一騎討ち」の末、島尻氏の圧勝と言つても過言ならぬ残念な結果となった。前県知事選の劣化バージョンと言つては失礼だが、「格差社会」をスローガンのに多数の選挙カーで連呼すれば民意に通じるとも考えていたのであれば、この「野党連合」というものは救いようがない。市井の感覚からすれば「格差社会の問題はそうだが、カリマタ選挙カーうるさい」の一言に尽きる。国策により累積・悪化する社会矛盾を改革するため何をするのか、何をしてきたのかがまるで見えてこないのは、島尻氏の「台所」や「子育て」が低所得者層の世情一般を反映したものとは全く思えない電通的キャッチフレーズに過ぎないものだとしても、連合の「労働貴族」に「格差改善」などと言われたくないと思うだろう。それは狩俣氏の個人評価の問題ではなく、労働組合の組織率が物語っているものの結果ということだ。基地問題にしても、経済問題にしても、何もかもが半端な「革新」に望みを託そうとする者が増えることはない。

沖縄―韓国―日本の国際連帯を強めよう

「愛国」を自称する売国政府の方針により、沖縄の過重な軍事負担はより悪化している。金武町の都市型戦闘訓練施設、嘉手納へのパトリオット・ミサイル(PAC3)及びF22戦闘機配備、オスプレー配備を絵図に入れた東村高江区域をはじめ

めとするヘリパッド建設、そして辺野古新基地計画と、民意を徹底的に無視、あるいは脅迫・金づるで懐柔し、カルト教団創価学会を始めとした選挙対策に奔走、特に北部地域の総合軍事拠点化を自論む米軍再編に追従・同調し、なんとしても沖縄を拠点に位置付けようと縛りあげている。対抗議案勢力が腑甲斐無い以上、議会制民主主義を補強し乗り越えるのは大衆的政治闘争に他ならない。5月13日に行われる「嘉手納基地包囲行動」に結集し、高らかにその声をあげていこう。

していくのか。マスメディアや「大人」の信憑性は崩れ、「愛国」という抽象タームに依存されやすい世情の中で、境界域からの発語による「近代国民国家・日本」の有り様を批判検証すると同時に、国際連帯の質が問い返される。是非多くの方の参加を期待したい。

今こそ「復帰―反復帰」の総括を

翌14日には、ピョンテク(韓国)の厳しい闘いを担ってこられたチャン・トジョン氏を囲み「アジアから基地をなくそう沖縄集会」が開催される。東アジア戦略を展開せんとする日米帝国主義の軍事拡張路線に対して、沖縄・ピョンテク・岩国・座間をはじめとする各地の闘いは、国際連帯の可能性と必要性を喚起する。その可能性は基地問題にとどまらず、人民による社会改編をどのような国際的視野において結び得るのかという問題の萌芽として位置付けられる。45年沖縄戦―52年サンフランシスコ講和条約による切捨、47年台湾2・28事件、48年済州島4・3事件及び50年朝鮮戦争等、境界域での惨事が日本の「敗戦責任」の放棄に端を発することは言うまでもなく、今なおアメリカの東アジア戦略の犠牲と懐柔のもとにさらされている。中国共産党やロシアによる覇権主義もまた同列である。そして沖縄戦における住民集団自決への軍閥を事実否定させた教科書検定に露骨に表れる日本政府の戦争美化、改憲―戦時国家化への諸策動、このキナ臭い状況からいかに脱却

1971年6月17日「沖縄返還協定」は結ばれ、翌1972年5月15日、沖縄は「日本の一県」となった。今の「沖縄県」を、当時の多くの人々が求めていた「復帰」と同義だと、とても言えないだろう。「平和憲法への復帰」と捉えるなら、憲法制定過程から除外されていた沖縄は、現行政権による改憲に異議を申し立てる権利がある。地元紙による世論調査や、市町村長アンケートをみても、反改憲の意志は明らかにあってきている。「復帰運動」「反復帰論」という二種の運動の総括として琉球弧という多様な民俗社会の中から、「日本」「東アジア戦略」というものと、どう異化する道があるのか。様々な視点を射程に入れ、ともに闘っていこう。



コラム

根源的なもの、
あるいは真理への希求

およそ二六〇〇年前、古代ギリシアにおいて哲学が誕生した。そのとき、哲学の創始者たちが発した問いとは、ものごとの根源、つまり「アルケー」とは何か？ というものであった。そこで、タレスは水であると述べた。アナクシメネスは空気であると、あるいはもしアルケーがあるとすれば、それは有限的な具体的物質ではないと考えたアナクシマンドロスは、それを無限定なもの（アペイロン）と述べた。後に彼らは活躍していた場所にちなんで「ミレトス学派」と呼ばれるようになる。しかし、そこで問題が起こった。アルケーがあるとしても、そこからいかにして他の様々なものが誕生してくるのかということである。いわゆる「存在」と「生成」の問題である。

これに対して一定の解答を与えたのが、「エレア派」である。彼らは「存在」を重視し、生成を否定した。アルケーの持つ根源性に固執したのだ。つまり存在するのはアルケーであり、そこからは何もかも生成してこない、われわれが日常的に眼にしているものは、いわば幻影である。パルメデースやゼノンなどその代表だが、彼らは「本当に存在するもの」だけを認識の対象にしなければならぬ、うつろいゆくもの・死滅してしまうものなどを認識の対象にすれば必然的に誤謬に陥る、なぜなら正確な認識は常に不変であるからだと主張した。

それに対して登場したのがヘラクレイトス、彼は「万物は流転する」と述べた。つまりこの世には「生成」しかない。彼にとつてのアルケーは火である。火は生成変化の象徴なのだ。それを背後で司るのがロゴスである。ロゴスこそが世界の秘密をつかむ。

こうしたエレア派とヘラクレイトスを和解させようとする試みとして現れたのが、ピュタゴラス学派である。彼らは哲学の求める恒常的存在は数であると主張した。数は経験的

する基本的な営みとしての還元主義が生まれた。他の哲学者についても然り。

古代ギリシアの哲学者たちは、ただうつろいゆくもの・死滅してしまふものを前にして、そして自らがまさに有限な存在としてあつてしまふこの現実を直視したとき、それでもなお在り続けるもの、変化しないもの、すなわち普遍的のものを求めたのである。人間も含めて、経験的なものはすべて変化し、消滅する。そんなあまりにも悲しい現実の中にあるながらも、しかし、そうであるがゆえに永遠の存在を求めたのである。真理への希求。真理は普遍・不変的なもの、永遠なるものごとを指す。

マルクス主義者たちも真理、根源的なものを求める。まさに根底に横たわっているもの、経済的・下部構造であり、万物を制御する歴史法則である。マルクス主義者たちよ、おごるなかれ。人類は二六〇〇年、ものの考え方を変えていないのだ。マルクス主義者といえども、考える輩にすぎない。確かにそうだ。マルクスも学位論文においてデモクリトスとエピクロスに回帰したのだ。